

〔新刊紹介〕

「日本三景展」実行委員会編

『松島・天橋立・厳島 日本三景展』

阿部 綾子

文化施設における数々の展覧会の中で、心惹かれる企画とはどのようなものだろうか。展覧会の面白味は、企画のテーマが、観覧者が「知らないこと・もの・人物」を扱っている場合と、「既に知っていること・もの・人物」とを対象にしている場合とでは、異なるように感じられる。前者の場合、面白味を感じるには、相当なインパクトが必要である。後者の場合は、良く知っているつもりであった、あるいは潜在的に持っていた知識をより深められ、知識欲が満たされることがポイントとなるのではないだろうか。

右のような視点に立った時、広島県立美術館・京都文化博物館・東北歴史博物館の三館合同企画による『日本三景展』（各会期は平成一七年八月二日～九月四日、九月一日～一〇月一六日、一〇月二五日～十一月二七日）は、後者を代表するような企画と位置づけることができる。日本三景は、多くの日本人の耳になじんだフレーズであり、三景のいずれか（あるいはすべて）に、修学旅行や家族旅行等で訪れた人も多いことだろう。ところが、改めて「日本三景とは何か」と問われれば、明確に答え得る人は少ないように思う。

『日本三景展』はそうした疑問に正面から挑んだ展覧会であり、三景

という日本人の共通理解がどのように生まれ、愛されてきたのかを教えてください。写实的な、あるいは豊かにイメージ化された絵画の数々には迫力があり、ぜひ会場に足を運んでもらいたい展覧会である。ここではその展示図録について、簡単に紹介したい。

まず、図版部分の構成は、四部に大別される。「プロローグ 知っていますか？日本三景」は、三景が描かれた三幅対や、京都祇園祭の山鉾の懸装品を紹介し、導入としている。「イメージ・ヒストリー 古代・中世の三景」は、表題通り、三景各所の中世までの歴史を、ゆかりの社寺等に残る資料から跡づけている。「グランド・ツアー 三景をゆく」は、本書の核心部である。三景が生まれた江戸時代を中心に、三景がどのようにイメージ化され、描かれてきたのかを、多彩な絵画表現から探っている。「エピローグ 美しき渚」では、三景そのものではなく、美しい磯の風景を描いた屏風を紹介して幕としている。

次に、図録によせられた各論について述べる。

本展覧会の企画構成アドバイザーである島尾新氏は、「日本三景への誘い」の中で、物語の厚みに支えられて三景の今日があることと、その物語性こそが今後の三景にも重要であると説く。

三景のみならず、名所景観の諸相を歴史的に明らかにした『失われた景観』の著者である長谷川成一氏の「日本三景―概念の形成と名所景観の保存―」は、名所とは何か、三景という概念がどのように成立してきたのか、諸人の共通認識を得た名所がいかなる努力の上に維持されてきたのかを的確に説明している。いわば本書の骨子となる論考である。

伊藤太氏「天橋立と歴史都市―メディアからみた名所―」、高橋修三

氏「厳島の歴史をめぐる」市・芝居、そして富籤」、堀野宗俊氏「松島の月」は、各名所がいかなる歴史を刻んできたのかを、それぞれの視点で明らかにしており、興味深い。

鈴木浩平氏「浮世絵にみられる日本三景について」は、三景が浮世絵版画として登場する過程を丹念に拾い出しており、三景イメージの大衆化を知る上で手がかりとなる。

野口剛氏「江戸時代の人々は日本三景の絵画をどう見たか」は、絵画作品として描かれた三景の、鑑賞のされ方についての考察である。人はなぜ絵画を描き（描かせ）、鑑賞するのか、という大きな問題ともつながっている。

佐藤琴氏「月まつしまに日がのぼる」は、松島の絵画表現が、多くの文人の実見や、三景という枠組の成立を経ることで、変化を遂げていることに注目している。

知念理氏「日本三景展ノムコウ」は、三景の「昔のような元気がない」現状への危機感から本展覧会が組み立てられた経緯を伝えている。なぜ元気がなくなったのか、氏の分析は示唆に富み、三景の明日を見据えるための、重要な視座を提供している。

全体を通して、筆者が改めて考えさせられたことは、三景という共通理解を生み育てた、江戸時代という時代の特性である。一七世紀に生まれ、江戸時代を通して醸成された三景。三景は諸人の注目を集め、文人は、好むと好まざるとにかかわらず、自分なりに「日本三景」という名所を咀嚼し、次世代に守り伝えていった。

価値観の多様化した現在では、かつてのような共通理解をそのまま共

有しようとする気運が、日本人から薄れてしまっているだろうことは否めない。このことと三景の現状とは無関係ではないだろう。それだけに本書は、「日本三景とは何か」という命題を通して、「日本人とは何か」という大きな問題をも投げかけているように思う。

最後になるが、三館合同企画という難しいハードルをこえて、心に残る展覧会を生み出した関係者の方々に、心より敬意を表したい。

（A4菊判、二二七頁、「日本三景展」実行委員会、

二〇〇五年八月刊、二〇〇〇円）

（あべ・あやこ 福島県立博物館学芸員）